

未来への伝承

土屋篤直と垂松亭八景

穴塚のイモに田土部のゴボウ、土浦城外丸の菊、新治小野向上庵の梅、これらを江戸の土浦藩邸にせっせと送っていた藩主がいます。霞ヶ浦沿岸の加茂(かすみ)がうら市)で地引き網を見物し、捕れたコイ、土浦で作らせた餅菓子やそば粉、時には重箱に「小鳥そぼろ」を入れて送りました。

土浦藩領の産物を取りどり江戸にもたらした、あたかも「観光大使」のような藩主は、土屋家4代篤直(1732~76年)です。

享保17(1732)年6月30日、篤直は3代藩主陳直(のぶなお)の次男として江戸藩邸に生まれました。まもなく父陳直が40歳で歿し、篤直は享保19年3月、3歳で藩主になりました。すでに祖父政直も他界しており、幼い篤直の後見には親戚土屋亮直(あきら)が付きました。亮直は旗本で、上総国久留里藩(千葉県君津市)主だった土屋本家の子孫です。篤直は土浦在城中、奥方の登美子へ、そしてこの亮直へ、産物を送っていました。

土屋家は江戸に定住する大名で参勤交代はありません。江戸生まれで江戸育ちの篤直が、初めて土浦への帰城が許されたのは寛延3(1750)年、19歳の時で

した。およそ20年振りにやってきた藩主、しかも若き篤直を、土浦の人たちはどのように迎えたのでしょうか？

残念ながら庶民の反応は文献上残っていませんが、篤直の振る舞いは「在城中覚日記」でたどることができます。2ヶ月余りの滞在中、土浦城内では読書屋敷を訪ねて藩士子弟の素読を見分しました。気候のよい初秋に行われた風干(ふうかん)に立会い、東櫓収蔵の朱印状や拜領道具、代々の藩主の自筆書画が新鮮な空気にさらされるのを本丸で見守りました。領内を巡見し、所々で和歌を詠みました。領内

国守る誓いや堅き楠の

散りて動かぬ石塚の神

とは、小山崎の路傍でクスノキの埋もれ木を見て詠んだ和歌で、領地を治めていく意志を託しているようです。水戸街道を写生し、「土浦道中絵図」(市指定文化財)に土浦を大都市として描きました。

なかでも篤直が愛した場所が小松の高台です。宝暦2(1752)年、小松の高台に小さな庵を建て「垂松亭」と名付けたのは土浦に帰るようになって3年目、篤直が21歳の時でした。以降帰城すると公務の合間を縫ってたびたび訪れました。藩の老臣を招いて麦飯やそば切、茶、時

には酒を振る舞い、夜になれば共に月を眺めました。近くの溜池を整備して滝を作り、千鳥ヶ滝と命名しました。

これほどまで小松の高台を愛したのはなぜなのでしょう。ここからは筑波山から土浦城下、霞ヶ浦まで藩領全体が見渡せ、しかも、朝夕に移ろう情景の緩急が見えたからではないでしょうか。この美しさを留めたいと篤直は願い、垂松亭から見える景勝8つを選び、江戸から付き従ってきた医師や儒者、土浦城内の儒者横手助次郎ら文事に明るい家臣が和歌と漢詩を賦しました。お抱えの絵師に水墨画を描かせ、その上に和歌と漢詩をほどよく配して画卷「垂松亭八景詩巻」が完成しました。

領内をくまなく見て回った若殿がいずれの地を八景に選んだか、ぜひ実物でご覧ください。画卷序文には「君臣その楽しみを同じうす」と意義がうたわれています。文雅を好んだ篤直のありようは、のちに庶民の文芸にも大きな影響をおよぼしていくことになりました。

※「垂松亭八景詩巻」は5月7日(日)まで土浦市立博物館第38回特別展「土浦八景―よみがえる情景へのまなざし」で展示しています。



▲垂松亭八景詩巻「高津晴嵐」



▲垂松亭八景詩巻「小松秋月」